

第2回 社会教育委員会議 議事概要

1 議事

(1) 報告事項

第3次札幌市生涯学習推進構想の令和3年度実施状況について

(2) 協議事項

学びに対する無関心層にどう働きかけるか

2 日時

令和4年(2022年)11月17日(木) 10時00分～12時00分

3 場所

S T V北2条ビル6階 教育委員会A・B会議室

札幌市図書・情報館ミーティングルーム2

4 出席者

(1) 委員(出席8名)

鈴木委員、出口委員、臼井委員、高橋委員、安田委員、中野委員、本間委員、
出葉委員

欠席：一戸委員、榊委員

(2) 事務局(5名)

村上生涯学習推進課長、小柳生涯学習係長、逸見推進担当係長、三津橋職員
山下職員

(3) 視察先説明者(於：札幌市図書・情報館)

浅野中央図書館調整担当課長

5 開催形態

公開(マスコミ関係者2名傍聴：北海道通信社2名)

6 会議内容

(1) 配布資料

資料1-1：第3次札幌市生涯学習推進構想(令和3年度実施報告)

資料1-2：第3次札幌市生涯学習推進構想 関連事業実施状況調査票

資料2：令和4年度第2回社会教育委員会議協議資料 協議テーマ

(2) 報告事項

第3次札幌市生涯学習推進構想の令和3年度実施状況について

ア 事務局から資料1-1及び1-2を用いて説明（小柳係長）

説明要旨

○報告の趣旨

- ・3次構想の第5章に進捗管理について定めてあり、そこには、市が年度ごとに3次構想の関連事業の実施状況を把握する、それから、しっかり教育委員会議にその実施状況を報告し、行政外部の立場から意見を聞き、施策の効果的な推進に役立てているとしている

○資料の構成について

- ・3次構想の推進に関連する本市の事業について、各所管課に確認し、令和3年度の実施結果、課題、令和4年度の実施予定について取りまとめた資料1-2をもとに、代表的な事業例を取り上げつつ振り返りを行ったものが、資料1の令和3年度実施報告ということ。

○令和3年度の取組の総括部分に絞った内容説明

- ・令和3年度は、昨年度に引き続き、多くの事業で規模を縮小したり、実施方法を変更するなど、新型コロナウイルス感染症の拡大による影響が見られた。しかし、このような中でも、講座やセミナー等の開催にオンラインの手法を用いるなど、様々な工夫によって学びの機会の確保・充実に取り組んだ。
- ・ウィズコロナにおいては、このように遠隔から移動なく参加できるといった利点などを生かしながら、新しい手法を活用するなどして、より効果的な事業の実施を検討していくということが今後も課題の一つであり、その際、対面型の学習機会を減少させるのではなく、引き続き、人と人とのつながりづくりを育む対面の形とオンラインの組み合わせを上手に考えていくことが必要。
- ・市民のデジタル利用をサポートするような取組みというものも見られ、私たちの生活にインターネットを利用したサービスというものが浸透し、今後も学びの機会も新しい技術を活用する形が広がっていく一方で、全ての市民がその恩恵を受けられるように、引き続き、このようなICTリテラシーを身につけられるような学びの機会というものも併せて実施、充実さ

せていくことが必要。

- ・会議での報告後、本書はホームページのほうで公表予定。

イ 主な意見・質疑応答

- ・開催が非常に厳しい環境の中、こういうICT、いわゆるオンラインやオンデマンドも活用して、模索しながら、講座やセミナー等の開催にこぎ着けたのは非常にすばらしい。コロナに見舞われたことは非常に不幸なことではあったけれども、いろいろな形でデジタル化が進んできており、世界でもあらゆることにそういったデジタルをうまく活用して、非常に国民の生活が豊かになるような形ということで、学習にもかなり活用されていて、そういった中で、多様な人材が輩出されているということもある。そういった形で、デジタルをうまく組み入れて活用していくという発想は、生涯学習構想においても、これからの流れを考えると非常に重要。マイナス面をうまく活用しつつ、うまく今後も、ICTなどの活用を考えていっていただきたい。

私の研究分野での学会活動も、コロナ禍では、そういったオンラインやオンデマンドも結構活用されていて、やはり実際に対面で行って議論ができないというのは非常に寂しいことではあるが、ただ、その反面、学会やセミナーでは、今までなかなか参加できなかった方が結構参加していただける。特に、いわゆる交通弱者や移動弱者と呼ばれる、移動にちょっと困難を覚える方も非常に参加していて、こういった物理的なバリア、時間的、費用面でも非常にバリアが解消されるということもあって、参加しやすくなっているという状況があると思う。やはりそういったいい面もあるので今後うまく活用して行って、生涯学習構想の中でも、なかなか参加していただけない方にも、そういったものも活用しながら、多様な方、皆さんが学習しやすいような環境をつくっていくことが重要かなというふうに改めて思った次第。その辺を今後ぜひ進めていただきたいなと思っている。（鈴木委員）

(2) 協議事項

学びに対する無関心層にどう働きかけるか

①事務局から資料2を用いて説明（村上課長）

ア 説明要旨

- ・前回の会議では、人生100年時代の生涯学習についてということで、三つのキーワードをもとに御議論を進めていただき、その概要については、本日お配りしている資料の3枚目にまとめている。本日の会議では、前回のこの議論を踏まえ、学びに対する無関心層にどう働きかけるかと、学びをボランティア活動やまちづくり活動につなげるには何が必要かと、こういう二つのテーマをいただいている。本日は特に、テーマの①「学びに関する無関心層にどう働きかけるか」について御議論をいただきたい。

前回の議論で、高齢者や子育て家庭の孤立を防ぎ、生きがいにつなげるためにも、いろいろな情報をタイムリーに届けることが重要であるという御意見をいただいた。その中で、最近できた新たな生涯学習施設で効果的な取り組みができてきている事例ということで、札幌市図書・情報館のお話が出ていた。そこで、本日は、後ほど実際に図書・情報館を見ていただき、どういった取り組み、利用者へのアプローチというのが効果を上げているのかということを感じていただき、さらに御意見を頂戴したい。

また、御意見をいただく際には、図書・情報館のように新しい施設をどんどん作れるというわけではないので、今ある資源、地域の図書施設やコミュニティ施設などを生かすとすれば、どういった工夫が必要かと、こういった視点でも御意見をいただければと考えている。

そこで、資料1枚目の中段に、札幌市内の学習拠点というのを紹介させていただいており、都心部では、これから御覧いただく図書・情報館が新たな学びの場として機能している。その一方で、各地域においては、区民センターや地区センター、コミュニティ施設といったものがあり、市民の身近な活動の場となっている、ここには図書館の機能もある。さらに、各区には各区の地区図書館というのがあり、学校図書館についても地域開放を行っている。そして、これらを結ぶ中核施設ということで、中央図書館と生涯学習センターが連携して取り組んでいると、こういった構成になっている。こうした札幌市内の施設配置というものを御理解いただき、既存の施設を生かしてどのようなことができるのか、こういった視点での御意見をいただければというふうに考えている。

②本日の協議について（鈴木委員）

- ・ 前回提案のあったテーマは、テーマ1は「学びに対する無関心層にどう働きかけるか」、テーマ2は「学びをボランティア活動やまちづくり活動につなげるには何が必要か」。本日は、このうち、テーマ1のほうで議論を行いたい。議論に当たっては、資料2でアンダーラインの引かれている箇所を確認いただいて、それらを意識した上で御意見をいただき、今後の市政運営に生かしていただこうと考えている。

今回は、資料として、市内の学習拠点を都心と地域に分けて例示していただいております。このうち、今回は、都心の学習拠点でもある札幌市図書・情報館について、本日、現地視察をし、より現実に即した議論を行うための材料としたい。本日は、現地で札幌市図書・情報館のコンセプトをゼロから作り、初代の館長に就任した浅野隆夫中央図書館調整担当課長に御案内いただけるとのことで、施設の視察後に質疑応答の時間も設けていただいているので、利用者の様子や館をつくることになった背景とか、様々なことをお聞きいただければと思っています。

【札幌市図書・情報館へ移動 於：ミーティングルーム2】

ア オリエンテーション（浅野中央図書館利用サービス課長）

- ・ 予期せず、市役所から図書館に異動したところ、2回びっくりした。1回目は、図書館の情報収集力の素晴らしさ。売っていないような本や資料までそろえているのが図書館だということ。もう1回びっくりしたのは、外に十分なPRができていないこと。わかりやすい展示も不足しているし、ネットでお知らせすることも余りない。つまり、気軽に来て学んでもらえるアピールができてないことが非常にもったいないなという思いをした。

もう図書館という言葉を使い続けるのも考え直したほうがいいと個人的には思っている。大事なものは、図書館（やかた）として本を守るという出発点ではなくて、人がどういうふうに自分をバージョンアップしていくのか、その手伝いをしますよ、というところから打ち出すのほうがいいと思っている。

コロナ前後の最大の変化として電子図書館の利用者が月ベースで最大で2.6倍となり、今も1.6倍で定着をしている、家や、移動中、つまり図書館の外で

利用されている。もう一つ、中央図書館の来館者は減っていた時も、貸出数は変わっていない。つまり、図書館の価値は変わっていないが、図書館にわざわざ行かなくても、インターネットで予約をして家の近くに本が届く、でいいじゃないか、電子で十分ではないか、あるいは、本を借りに行くためだけにわざわざ図書館に行くのはしんどいなということに、このコロナのときに気づいてしまったのではないか。

このような「クラウド化した図書館」、つまり読みたい本がどこの図書館にあるかは意識しない図書館サービス。それ自体は利便性の中で語られるべきことであり、どんどん効率的に進めるのがよいと考えている。しかし、それだけでは、笑い話のようだが、図書館は佐川急便の倉庫に本が入っていて、運送で届けばいいのではないかとされるのではないか。

しかし、それだけでは人々はどんどん学びの機会から遠ざかる。そのため、もうひとつの図書館像として、「ダウンロードできない価値を生む図書館」、そこに司書がいる、集まれる場がある、そういう意味も同時に追求していきたい。札幌市図書・情報館はそのような場所と考えている。

図書館に異動してきてから「最近、図書館に行きましたか」という質問を会う人すべてにしてみた。「子供が小さいときには絵本を借りに行った」、「学生時代に自習はしたけど、それっきりだよ」とか、「図書館って小説がただで借りられるところというイメージなのだけど、予約がいっぱい入っていて借りられない」という答えが主であった。いずれにしても「本が無料で借りられる場所」、これが本当に「みんなの図書館」なのだろうかと思はる。

この図書・情報館の計画をいただいたときに、4万冊規模という一般的な図書館としては非常に狭いことに困惑したが、都心の中にあるメリット、これを生かすためにはどうしたらいいかと考えた。

そこで、思い出したのは先ほどの答え。つまり働いている人、現役世代の人が、仕事帰りに気軽に立ち寄って、気軽に学べる場所。それに集中するなら、この狭さでもやっていけるのではないかと思った。

考え抜いてたどり着いたコンセプトは「はたらくをらくにする」。働くことは素敵なことである、できないことができるようになったり、いろいろなひとと交流できたり、もちろんお金ももらえたりもするが、例えば新しい仕事を担ったと

きに、「私にできるのだろうか」と思うのは常だし、日ごろでもお金のことや健康のことで心配になったり、大切な方との関係が崩れていくと、いい仕事はできないとも思う。そこをサポートしたい、そんな意味である。

この言葉は入り口にも大きく掲示しており、利用者に対する声明でもあるが、同時に私たちスタッフもどんどん入れ変わっていくうちに、コンセプトがぶれないように、皆、この言葉を原点に常に動き出せるようにと考えている。

このコンセプトを追求するため、本はジャンルは「WORK」と「L I F E」と「ART」のみで、小説、絵本のコーナーは置いていない。

それと、テーマに沿った棚づくりを行っている。図書館に行って、「何か分かりづらいな」という思いをされるのは、図書館は自然科学、社会科学、哲学、言語、総記とか、そういう国内共通の並び方がされている。そんなふうに並ばれても、もちろんそれを学べば図書館使いはとても楽にはなるが、やっぱり一般の方は身近な存在にはなれないのではないかなと思った。

また、本の貸出しもせず、館内閲覧のみにさせていただいた。これは、今調べたい、今それを学びたいといったときに、いつでも図書や情報に触れられるようにしたもの。知りたいときに何週間や何か月も予約の順番を待たせてしまうという状態では、気軽な学びの場にならないと考えた。

「WORK」のビジネススキルの棚に来ると、例えば「人前で話す準備」とか、「腹を立てない方法」とか、それから、「上司の苦悩」、そういうものが、テーマとして並び、役に立つ本が選ばれている。別に言葉遊びをしているわけではなく、年代別のヒアリングをやって、そこから得られたニーズから司書がつくり出した言葉。それに従って選書をしている。つまり、ひとびとの課題、つまりニーズを出発点としている。

その結果、「本棚がともかく面白い」と言っていただけになった。これは我々にとって図書館冥利につきることである。

図書・情報館の棚は、ひとつの棚を上から下まで1人の司書がつくっている。普通は団体行動になってしまうのだが、ひとりの司書が自分のものとして築いている。わたしには「花壇のようなもの」に見える。花壇であれば、どんな花を植えようかとか、当然、お水もあげたり草も抜いたりして、1人の司書がそこを育てていつていることを感じている。

また、文部科学省の資料にも登場する「課題解決型図書館」という言葉についても触れておく。図書・情報館はこの範疇の図書館であるが、正確には図書館だけでは課題を解決しきるまでの力はなく、役割分担や連携で実現すると思っている。図書館はファンドを持っていないし、経営相談そのものを司書が受け持つことはないからである。

当館のリサーチカウンターで、司書は様々なビジネスの情報を求められる。「外国人に対して、SNSで見栄えがする料理の盛りつけの本が見たい」とか、「夜景の経済効果が知りたい」とか、「ストーンを使ったアクセサリーのお店をやりたいが、北海道の産地を教えてほしい」などである。それに対して司書が、「こういう本を読んだらいいですよ、こういう新聞を調べたらいいですよ、といった対応を行う。実際、「アクセサリーの店を開くにはどうやら300万円かかると本に書いてありました。どうすればいいんですか」と問われた時には、金融機関の方、ビジネスプランナーの方に毎日のように無料相談に来ていただいているので、そこに引き継いでビジネスが育っていくという仕掛けをしている。気軽に学んだ先に、どこに連れていくのか、そこまでのロードマップを描くことが大切である。

世の中では本離れが言われているが、読書への欲求が消えていないと感じている。ひとえに書店がどんどん閉店して、本が人に届いていないという状況があると思う。当館のように本をわかりやすく、整理して並べて手に取りやすくしてあげたら、多くの方に読んでいただけることがわかった。

開館前はビジネスパーソン以外にはさほど利用されないだろうと考え、年間30万人を目標にしていたが、開館してみると100万人の来場者を数えた。本は豊かなコンテンツなので、いろいろな方に読んでいただける、例えばビジネスのプランの本でも発想するために読むということが出来る。そのため、仕事帰りのビジネスパーソンだけではなく、幅広く利用をいただいている。

うれしい声も幾つかいただいている。「本の世界にまた戻ってきました」とか、また、「泊まれませんか」はよく言われる。泊まれませんが（笑）近くに引っ越してきた人は結構いる。

市長に「税金を払っていて良かった」というメールが届いたと聞いた。これは何人にも言われたことでもある。目に見える心地よいサービスが市民へのインパ

クトになるのであろう。

よく「尖った運営していますね」と言われるが、全然そんなことはないと思っている。むしろ貸出偏重をやめ、司書の工夫を最大限伸ばすことによって、利用者が図書館に多く戻ってくるということ。むしろ図書館の原型に戻っていることを感じる。今までは、本を借りる場所というのが図書館、それが、アイデアや解がどんどん飛び交う場を目指したのがよかったのだと思う。

何人かから「頭の中がとてもクリアになりました」と言っていただけ。つまり、本棚のタイトルを見ていくだけで、私と同じ悩みを持っている人がいたみたい、克服した人もどうやらいるらしいということを感じているのだと思う。

イ 図書・情報館視察

ウ 主な質疑応答、感想等（於：ミーティングルーム2）

- ・当初、こういう目的でつくろうとか、いろいろな場所のコンセプトだとか構造とか、今までの図書館とは違うスタイルでやって4年たったということは、その結果、当初どおりだったなというようなこととか、これはちょっと予想外だったなというようなこととか、こんな状況があるなら、もうちょっとここを変えていきたい、そういう思いがあったかと思うのだが、この4年間の中でそういう変容はあったか。（臼井委員）

→特にコンセプトが外れたということは感じていない。もっと多くの働く人たちに来ていただけるように工夫を重ねている。

「図書・情報館の成功とは何か？」という質問をされたことがある。その答えは「市役所であれ、会社であれ、団体であれ、個人であれ、何かを実現するときのピースとして必ず図書・情報館が入ってくる、あそこがないとうまくいかないよねというふうになること」と考えている。そこに向かって活動していきたい。

組織的な後ろ盾のないスタートアップを目指すような個人が力をつけてももらいたいし、1階でやっているトークライブも、いろいろな部局、会社さんとコラボレーションしてやっている。それが広がって行って、あそこがないとうまく事が進まないなと思ってくれるようにしたいと思っている。（浅野課長）

- ・例えば閉館は21時、夜。そうすると、翌朝9時まで空くので、ぜひ、このまま、

資料を明日の9時に返すから貸してほしいみたいな声はないか。(臼井委員)

→、図書館のサービスの中では、「一夜貸し」というのが存在はする。私は総務省のアドバイザーとして活動しており、いろいろな街の図書館づくり、例えば神戸の新規計画にもアドバイスしているのだが、最近はホテルに図書館がくつつくパターンが出てきている、そのホテルのお客様には例えば一夜貸しをしてもいいのではないかなというのはある。ただ、やっぱり返ってこないのが怖い、常にあるという状態が私たちは大事だと思っているので、それが例えば本当に隣接しているホテルであれば何とかなるかなとは思いますが、市内全域ということになるとちょっと難しいのかなということはある。(浅野課長)

・持ち込んではいけないものはあるのか。(臼井委員)

→危険物でなければ。(笑)一般的に図書館は、入りづらい空間になっていなかったか、と考えていた。べからず集が壁にいっぱいあり、緊張を強いる場所のような雰囲気がある。図書・情報館は、別にしゃべってもいいし、飲み物もオーケーだし、コロナ前は1階のみ食べ物もオーケーにしていた。前に、人気作家の方がいらっやって、自由を感じますとおっしゃってくれた。

飲んでもいいし、しゃべってもいいし、本はこの辺にあるから読んでいってよという感じで、自由に過ごしていただく、そういう雰囲気ってやっぱり大事なのかなと思う。

スタッフには、コーヒーをこぼされたら、迷惑がるのではなく、「やけどしなかったですか」って言ってほしいと言っている。司書は本の修理ができる、一年目で本当に駄目になった本は1冊だけである。(浅野課長)

・普通の図書館にいる司書の方とここにいる司書の方で、何か違った能力が求められているのではないかなと思うが、その辺はどうなのか。まず改革しようとする、司書が猛反対して、コーヒーを飲めるようにするだとか、サイレントだとかいうのには一番反対する勢力、それに対してどういうふうに努めてこられたのか。(鈴木委員)(出口委員)

→うちの図書館は一言で言うと、人に寄り添う図書館である。人に寄り添って、助けたいので、ひとの悩みや課題に沿った並べ方をしている。もっと言うと、最初の準備のときに、ある司書が、自分の友達が仕事で失敗して、あるいは、自分の彼女との仲が悪くなって、消え入りたい気持ちになった友達もいて...という話を聞いた。

そういう人たちを救うまではいかないかもしれないけど、気持ちを楽にする、あるいは必要な情報を提供することは僕らにもできるのではないかというような話をした。人助けのためにみんなやっているという意識。「図書館」という言葉をやめたいと言ったのはそういうところ。まず人を見て、その人にどういう本を差し出せばいいのか。それが最も大事。迷ったら、自分の友達に自信を持って呼べるかどうかで決めてくれと言っている。

司書で課題解決型サービスをやりたいという人に対しては、全国規模で行われているビジネス・ライブラリアン研修を受けてもらっている。もう22回目を数え、累計で何百人も生徒がいる。私も講師を務めている。

それ以外では、内部の研修をやって、お互い、問題を出し合ったりやかしている。あと、経済のキーワードや記事を提供してセンスを磨いてもらっている。

トークセミナーをやるというのも私はすごく意味があると思っている。司書が、自らテーマ決めてから、出演者への交渉、当日の司会までも務める。その中で、自分たちのお客さんというのはこういう人たちなのだを知る。こういう人たちを私たちは助けているという実感があると、選書とかにも生きてくる。役に立つ本を選んでもらうためにいろいろな感覚を研ぎ澄ませてもらうような機会をつくっている。

(浅野課長)

・たくさんすてきな部屋があり、借りるのは簡単だと聞き、カードをつくれればいいのかなと思ったのだが、よく見ると「貸出券」って書いてある。市の図書館の貸出券を持っている人が使えるのか。(本間委員)

→誰にでも気軽に利用してもらおうと、昔ながらの紙の、ICでも何でも無い券、それがあれば予約ができるというようにしている。(浅野課長)

・私はそのカードを見たときに、結局、貸出券だと思って、図書館の普及を考えた宣伝のためのカードなのかなと感じた。(本間委員)

→皆さん、子供のときにはつくったけれども、もう図書館に行っていないという人が今働くOLさんとかになって来る。そういう方が、ぜひ使いたい、じゃあ、カードをつくりませんか、そのときに、当然営業する。中央図書館や地区図書館に行くと、こんな本があって、借りられるのでいかがですかというのをお知らせする。

私たちは、札幌市の図書館、この四十数館あるものの中のひとつで、それをネット

ワーク的にちゃんとつなげるという気持ちというか考えがないとうまくいかないのかなというふうに思う。1枚あれば、ここにもふらっと来られるという意味で、非常に便利。電子書籍も借りられる。（浅野課長）

- ・いろいろな図書館を見てきた中で、すごく先進的というか、こんな考え方もあるのだと思った。今、世の図書館界は民間書店ブームだと思うが、何となく味気ないというか、人の温もりというのが感じられないと思うのだが、どう感じられるか。（出口委員）

→図書館を運営している有名な民間書店さんは、プレゼンがすごくうまくて、私も引き込まれそうになる。（笑）彼らは、駅前の乗降者数がこれだけ増えますよ、観光客がこれだけ増えますよというコミットメントをして、それで図書館を始めると聞いた。

そのため、実際、「全てお任せください」のパターンになっているのではないか。それが委員のおっしゃる温もりのなさなのかとも思う。運営している方の中には、本選びのプロも当然いらっしゃるが、出発点が違うので社会教育施設としての性格が薄くなるのではないか、とも思う。（浅野課長）

- ・民間書店さんは地元の文化とかというのを取り上げているのか。（出口委員）

→何館か回っているし、運営の中心的な方とも懇意にさせていただいている。しかし、来館したところでは、地元の文化を取り上げているという記憶はあまりない。（浅野課長）

- ・感想からお話しさせていただくと、図書館というものの既存のイメージや概念を、ボーダーレスというか、枠が何か自分の中でも解けて、既存の図書館だったらこうだったのかなと思うことも、フリーな感じになっていて、イメージとしては、図書館という建物があって、そこに本があって、それを借りる、読むを目的にして行く場所というところだったのが、この施設自体も複合施設だし、官民一体となった。例えばカフェとかとも境目なくつながっているような状態だとか、考えてみると、今新しく建てている札幌市立の学校なんかも複合施設化していて、まちセンだとか児童会館だとかと学校が全部一緒になっていたりして、既存の概念や古い枠組みというものを崩していくということの発想の転換みたいなことがやっぱり必要なのだなということを感じて、その図書館で話をしてもいいだとか、今までの図書館と違うところがあって、「べからず」がすごく少ない中で、今日、ちょっと「べからず」が一つ感じたのは、自習はしないでくださいということ。

例えばそこで試験勉強とかをしたりすると、本来の目的である、ビジネスニーズであるとか、生涯学習だとかという方々に対するサービスが、受験生で占領されてしまったりとかなわなくなるので、そこはちゃんとすみ分けているのだろうなど。そうすると、例えば札幌の図書に関して言えば、学校教育と、それから生涯学習というふうにと考えると、学校教育のほうとリンクする部分で言うと、絵本図書館だとか考えられるが、そこは専門性や役割分担みたいなのがあって、ここは学校教育と離れて、生涯学習に特化しているというふうには感じたのだが、こちらのほうで何か学校教育と公衆問わず、幼保、小中高大まで含めて、何かリンクする部分かあるのか。（出葉委員）
→中央図書館で私が所管だった係で学校図書館の支援を始めた。いきさつとしては、コロナ前は中央図書館でイベントをやって、そこでお客さんにいっぱい来てもらうようにして、読書普及をしていたが、コロナ禍があり難しくなってしまった。そこで考えた「子供たちに一番近い図書施設はどこか？」と。それは学校図書館である。今、中学校全校に学校図書館司書が赴任しているが、3時間程度の勤務となっていて、まだまだ大いに恵まれた状況ともいえない。

例えば共同して研修したり、相談に答えることを始めた。学校図書館が栄えることによって、結果的に市内の子供の読書が増えるという戦略をとっている。

図書・情報館について言うと、大学との連携というのがあって、北海学園の先生と一緒にあって、学生のビジネスアイデアコンテストとかを行った。コンテストだけやると、場所貸しというふうになってしまうので、それも第1段階、第2段階、第3段階みたいに審査を入れて、ブラッシュアップしていく。だから、本当に最初の案は結構たわいもなく、「本当に調べて書いたの？それ」みたいな感じになる。

1回目と2回目の間に、この日に来てくれたら司書がこういう資料を持って待っていますよというようなことをして、2回目に備えてくださいということはやっている。（浅野課長）

・ロビーのところの、屋根のついたようなところで学生が勉強しているのは、あそこはいいということか。（本間委員）

→そこは劇場を運営している市の財団の管理であり、図書館ではない。用途の制限はないので、特に、試験時期は自習生でいっぱいになっている。もし、図書・情報館が広ければ自習室もつくりたかったし、進路探求の本とか、恋愛とか部活とか、役立つ本とかも置きたかったが叶わなかった。支援していた長岡市では現在そういった取組が

できる施設を建築中で、オープンが楽しみである。

自習自体は素晴らしいことだと思っているので、開館当初、自習は無制限にしてみましたが、見事にすべての席が自習生で埋め尽くされた。ビジネスパーソンから、「使いたくても使えない」という声も聞いた。そこで、はたらくひとたちに学ぶ場を提供してほしい旨を学生たちにお願ひして、現在は外のエリアは自習可能、館内は自習不可としている。（浅野課長）

○浅野課長退席

【協議】

- ・テーマ1で「学びに対する無関心層にどう働きかけるか」に関連することとして、特に、今思いついたことや、何か特におっしゃりたいことがあれば御発言いただきたい（鈴木委員）
- ・コンセプトが、「働くを楽にする」みたいなことをしていたが、「学ぶ」とか「生涯学習」とかという言葉に、無関心層は、そこにバリアを感じる。さっき、ボーダーレスというふうにおっしゃいましたけど、多分、「学ぶ」と聞いただけで、人は構えてしまったりするということではないかと、勉強を思い出してしまったり。だから、私は、大学のほうでは、市民を集めるイベントとして、市民の方が大学を身近に感じてもらうために、遊びプロジェクトってやっている。そうすると、市民の方が気楽に来てくださるので、やっぱり遊びになると来てくれる。高齢の方が、大学なのに何で遊びかと言われたときに、我々は、遊びって、広い概念で、英語にすると play、ピアノを弾くは「play the piano」だし、ギターを弾くは「play the guiter」だし、そういう遊びの概念でいろいろ変えていくと、いろいろなことが面白くできる。例えば、それまでは能とか狂言を学ぶとやっていたが、能と狂言をもっと遊ぼうというふうにとやると、やっぱり人は来てくれる。だから、その「学び」という言葉とか「学習」という言葉の概念、あるいは、その言葉そのものが、さっきの「働くを楽にする」ではないけれども、そこに何かメスを入れると、もっと無関心ではなくなるのではないかなということを感じていた。（臼井委員）
- ・このテーマの学びって、何を指して言うのだろうかというふうに捉えた。やっぱり学びと言ってしまうと、すごい座学的な、教養がとかとを感じる。興味を持たせるための

イベントでもいいから、きっかけ作りが必要。やっぱり先ほども言った「学び」という言葉が重たいかなと感じてしまっている。ジェネレーションによっては体験も違うし知識も違うし、興味も全然違うと思うので、一括全部で学びというような捉え方は難しいところがある（高橋委員）

- この図書・情報館のコンセプトは、仕事や暮らしというのを全面的に出しているが、要は、その人にとって必要なものがあって、それを求めてここに来られて、もちろん情報もあるでしょうし、相談員も集まれるという環境があるから来られるのだと思うが、学ぶということは、人に教えてもらうということと、自分で学ぶということと両方あると思うので、ここはどっちかと言うと自分で学ぶというコンセプトで来られている人が多いと思う。それぞれ、今、みんなスマホを持っているわけで、何か、疑問だと思ったことは、それぞれみんな調べているはず。調べていることが、例えば、ウィキペディアだけで満足しているのか、それでは物足りなくて、さらに調べて本を読もうとかというふうに行くのかという、そこの、一つ越える山とがあるのかなと感じる。だから、みんな総じて調べていると思う。いろいろなことに興味を持って、これ何なのだろうってやっていることを、さらに次のステップに行くように、何か働きかけることによって、図書館に行くだとかということにつながっていくのではないかなと。図書館に行って、自分で調べて納得できないものは、講座を受けてみようだとかということにつながっていくのだから、何かしらの日々の生活の中で、疑問点だとか、もっと知りたいという欲望は、少なからず皆さん持っているはずだろうと思うので、それをどう次のステップに行くことができるか、そのきっかけなんかがとても大事だなというふうに今日の話聞きながら思った。（出口委員）
- 私も、やはり「学習」とか「学び」と言ってしまうと、今までの、学校教育を悪く言うつもりはないが、受験や、教科書を読んでとか、何かそういうのを想像してしまうと、やはり抵抗感を感じるというか、多少のバリアを感じるということだと思う。きっかけという話もあったが、今回、こういった視察をさせていただいて、お話を伺いながら感じたのは、顧客目線、人の目線というか、使う人の目線、生涯学習で言うと、学びたいというか、本当にいろいろな人の目線ということ、それぞれのテーマに合った形でのきっかけを少し考えていくのがいいのかなというふうに思った。何か、悩みから探すみたいな言い方もしているから、興味とか悩みとか、ちょっと一段引いたところからまた生涯学習というものを考えていくということが必要ではないかなと

いうふうに思った。

皆さんのお話から、また、浅野課長のお話からも、いろいろなキーワードがあったかと思うので、その辺のキーワードをもとに、次回、このテーマの①について、また少し議論をしていきたいなというふうに思っている。

また次回はテーマ1を扱うこととして、もし時間の余裕があれば、テーマ2についてもちょっと触れていきたいと思っている。（鈴木委員）

7 連絡事項

次回は1月のお示しさせていただいた日の中のいずれかで調整をさせていただきたい。また、後日改めて皆様にお知らせさせていただくが、次回は、本日の続きのほかにサタデースクールに関する議題がある見込み（事務局）